

# 博 士 論 文 概 要

## 論 文 題 目

ファシズム期イタリアの  
全国ドーポラヴォーロ事業団に関連する建築の研究  
Study on the architecture  
of the Opera Nazionale Dopolavoro in Fascist Italy

申 請 者

奥田	耕一郎
Koichiro	OKUDA

2011 年 12 月

近年のイタリア・ファシズムにかんする研究では、国民による「同意」と体制による「強制」という対立を超えた理解が求められており、このときファシズム体制をイタリアの近代化過程にあるものとして捉え、20世紀における近代国家間の国際的競争社会という文脈から捉えるという社会科学領域の視点は、有力なもののひとつであると思われる。そこでは「全国事業団」という行政サービス機構が注目され、これら事業団のなかでもとりわけて成功したとされるものが全国ドーポラヴォーロ事業団(O.N.D.)である。20世紀前半のヨーロッパ諸国において、労働者らの余暇の組織化を試みることは共通の課題のひとつであり、O.N.D.は労働者の余暇(ドーポラヴォーロ)を組織する半官半民の機構であった。この余暇の問題は、社会的、政治的問題のみならず、文化的事象も含むものであり、建築の領域においても、このドーポラヴォーロに注目することによってより広い視野からイタリア近代建築を理解することが可能であると思われる。近代建築史は従来、芸術、産業、政治との関連において理解されており、とりわけてイタリアの近代建築は、ファシズムという体制が建築に極めて注力したため、その研究では体制とかかわりをもった建築家の活動に視点が偏りがちであった。一方、このドーポラヴォーロは、イタリアそしてヨーロッパの近代化過程のなかで決して無視できない建築活動を行っており、近代化の過程のなかでのファシズム期の建築の位置を考察する上で重要であると思われる。そこで本論文は、この全国ドーポラヴォーロ事業団に着目し、その建築分野での活動を明らかにすることで、イタリア近代建築をよりグローバルな近代化過程における営みのひとつとして理解するための、新たな視座を獲得することを目的とした。

ドーポラヴォーロと関連する建築・空間・環境を中心的に扱った研究は、本国イタリアにおいても確認が難しく、ドーポラヴォーロの管理運営及び余暇活動のための施設に関連しては、国家ファシスタ党の地方支部「カーサ・デル・ファッショ」の機能の範囲内に留まるかたちでしか捉えられていない。制度としてのドーポラヴォーロに関する研究については、その現代的意味の考察、再評価という点では、1981年のV.デ・グラツィアの研究をその嚆矢とし、国内では北原敦、高橋進らの研究が広く知られ、本論文でも参考とした。

O.N.D.の建築分野での活動はその概略も明らかとなっていない。そこで本論文は、O.N.D.が発行した各種出版物・定期刊行物のほか、当時の建築誌・新聞等、さらにO.N.D.の関連施設の写真が使われた当時の写真絵葉書を資料に用いた。O.N.D.の施設はイタリア国内のあらゆる箇所には所在しており、その全域での悉皆調査は困難を極めるため、本論文では近年その研究における有用性を高めている米Google社のインターネットサービス「Google マップ」および「Google ストリートビュー」を用いて、その所在地の特定を行った。

本論文は序論、全5章からなる本論、結論によって構成される。序論では上述した研究の背景、目的、既往の研究、研究の方法、論文の構成について述べた。

本論の構成は、まず第1章においてファシズム体制の成立期からO.N.D.の設立までを政治史、社会史の成果に依拠しつつ確認を行い、O.N.D.の基本的な性格を振り返ることで、以降の議論の前提を示した。O.N.D.の活動はファシスタ党書記長と兼務されたその組織のトップである特別コミッサーリオの方針に従っており、その任期によって時系列的な把握が可能であり、第2章から第5章はこの時系列に従って構成した。第2章では1927年から1929年にかけて行われた労働者住宅向けの家具コンクールを扱い、目標とされた家具デザインとその結果を明らかにした。第3章ではこのコンクールに続き1930年と1933年につくられた、2つの労働者向けモデル住宅にある相違点を、当時の住宅政策の変遷と、大都市ミラノでの実例とを付き合わせることで分析し、O.N.D.がこの住宅の問題から撤退する経緯を明らかにした。続く第4章では、1930年から活発化する余暇活動のための建築について事例を示しつつ分析し、その特徴を指摘した。第5章ではO.N.D.による催しのうち最大の規模で行われた1938年の博覧会建築の意匠について、その前年になされたO.N.D.の国有化との関連から分析し、この時点で起こったO.N.D.に関連する建築のデザイン上の転換を指摘した。最後に以上本論全5章をまとめて結論とした。以下本論各章の概要について述べる。

本論第1章では北原敦の研究に依拠しつつ、まずファシスタ党が資本家・経営者・地主・中間層の支持を受けつつ政権を獲得したことを示した。続いてデ・グラツィアの研究に依拠し、ファシスタ党の政権獲得から1925年のO.N.D.発足、1927年の党による掌握までを概観した。続いて党による支配を受けて以降のO.N.D.のあゆみを確認し、1927年に特別コミッサーリオとなったA.トゥラーティが行った組織の再編によって普及活動がシステム化され、より包括的な事業内容に向け活動が拡大されるなかで、労働者の住環境改善がテーマとなったこと、1930年にA.スタラーチェが後任となると、余暇そのものの提供に注力され、その余暇を実施する上での施設が必要になったこと、O.N.D.の建築関連の活動は主にこの2つにかかわるものであることを指摘した。第2章では、O.N.D.による低所得者層の住宅に適した家具の量産促進を目的とした家具のコンクール事業の全貌を明らかにした。O.N.D.はその計画を1927年4月に発表、最初のコンクールをヴェネト地方で実施し、その結果への不満から「公共の趣味」という概念を浮上させ、このコンクールに引き続き1928年10月から1929年1月にかけて実施された全国規模でのコンクールにおいてこの実現を目的に組み込んだことを明らかにした。この全国規模でのコンクールでは、O.N.D.が理想とする家具を得るための意図的なプログラムが存在し、これによって「好感」と前衛性を廃した過剰さのない「簡素さ」との均衡にある、理解しやすいモダン・デザインが追求されていたこと、このコンクールがイタリア製家具の近代化において重要なステップとなったことを指摘した。しかしこれら家具は労働者の購買力とは乖離したものとなり、またそれがこれら家具の広告に表れていたことを指摘した。第3章では、1930年の第4

回モンツァ・トリエンナーレと、1933年の第5回ミラノ・トリエンナーレで展示された2つのO.N.D.会員向けモデル住宅「ドーポラヴォリスタの住宅」を扱い、後者が前者より小型化し、内部の家具もより簡素になったことを指摘し、この変化について考察した。この労働者住宅の問題は都市の過密化と強い関係を持ち、1928年11月から開始された反都市化キャンペーンを取り上げ、1931年4月から無許可での県外転居が禁止されたことを確認したのち、当時最も人口流入・増加が著しくイタリア国内で例外的に住宅整備が進んだ都市ミラノにおける過密対策を整理し、これらの住宅が1933年以降ミラノの都市外縁部に作られていったこと、都市とその周辺における低所得者向け住宅の整備がICPと工場主へほぼ一任されていたことなどを指摘した。さらに、2つの「ドーポラヴォリスタの住宅」から看取される変化は、O.N.D.のこの労働者住宅の問題からの撤退の足跡を表していることを指摘した。第4章ではまず、1930年にO.N.D.が単純な気晴らしの提供へと方針を転換したこととその余暇の内容について確認した。その内容については、知識人や富裕層の伝統文化を普及型に変換して供給するというその権威主義的性格と、それがゆえにもつ都市的な性格の2点をデ・グラツィアの研究から示しつつ、仮設建築を用いた余暇が農村においても機動的に実施される様子について論じたのち、O.N.D.の活動拠点でもあった「カーサ・デル・ファッショ」についてその建築のプログラムを再検討し、これを「政治宗教の寺院」と理解することの一面性と、この一方で行政サービス施設としての面を有することを指摘した。続いてドーポラヴォーロ活動専用の建築として建設された「カーサ・デル・ドーポラヴォーロ」の事例を収集し、特にO.N.D.がその1938年の年報で積極的に広報したヴェルチェッリ県ドーポラヴォーロが、県代表施設であること、余暇機能が豊富であること、斬新さを追求しない親しみのあるモダン・デザインを有することなどによって、O.N.D.の性質をよく示す好例であると位置づけた。第5章では1938年にローマのチルコ・マッシモで開催された「第1回全国ドーポラヴォーロ博覧会」のパヴィリオン建築を扱った。博覧会の記録写真集掲載のテキストから、この設計に関わった人物が、1942年に開催予定であった「ローマ万国博覧会」(E42)の会場計画・建築設計において中心的役割を果たした建築家、C.E. オッポ、G. グェッリーニ、E. ロッシ、E. ラパドゥーラ、M. パニコーニ、G. ペディコーニらであったこと、これらパヴィリオンが国家的建築プロジェクトで用いられた洗練されたモダニズムのデザインを有したことを明らかにした。この余暇のための建築のデザインの変化は、これと同時期にローマで開催された国際労働機関主催の「第3回国際余暇・レクリエーション会議」に際しアピールを意図したことによるが、この前年のO.N.D.国有化によって国民と国家とが全体主義的に統合しつつあったことから、戦時体制へと向かうなかで階級的エリートが高級文化としてのモダン・デザインの独占を断念したことを意味するものと指摘した。

以上の本論の論述と考察をまとめ、結論とした。

## 早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

氏 名 奥田 耕一郎 印

(2011年 12月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
① 論文	
○1	奥田耕一郎「O.N.D. 主催「国民住宅のための経済的家具・室内装飾全国コンクール」を通じたイタリア製家具の近代化について. ドーポラヴォーロの建築における近代性の研究 その2」, 日本建築学会計画系論文集, 第76巻669号, 2011年11月, pp. 2233-2239
○2	奥田耕一郎「全国ドーポラヴォーロ事業団主催「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」にて見出される「公共の趣味」について. ドーポラヴォーロの建築における近代性の研究 その1」, 日本建築学会計画系論文集, 第76巻659号, 2011年1月, pp. 237-243
② 講演	
○1	奥田耕一郎「ドーポラヴォーロのつくった家具 -1927-29年のO.N.D.による住宅内部への介入について-」, 早稲田大学地中海研究所 イタリア言語・文化研究会, 早稲田大学, 2011年5月
○2	奥田耕一郎「O.N.D. 主催「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」(1927年)の家具計画案部門について」, 日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸) F-2分冊, 2010年7月, pp. 211-212
○3	奥田耕一郎「全国ドーポラヴォーロ事業団の労働者住宅施策にかんする建築史的考察 - 「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」(1927年)を中心に-」, イタリア近現代史研究会, 明治大学, 2010年7月
○4	奥田耕一郎「Diffusion, communication and liberty in the city: the public image of future city in 1930s」, 法政大学・イタリア国立東方学研究所主催シンポジウム【未来都市ヴィジョンの100年 - イタリア未来派から日本・アジアの現在まで-】 法政大学, 2009年9月, パネリスト: エツィオ・ゴドリ, ミルヴァ・ジャコメッリ, 横手義洋, 北川佳子, 奥田耕一郎(発表順5番), 鶴沢隆, 八束はじめ, 岡田哲史, 高村雅彦, Raffaella Pernice/コーディネーター: 陣内秀信, シルヴィオ・ヴィータ
○5	奥田耕一郎「1930年から1932年までの「Gente Nostra」誌にみるドーポラヴォーロ施設について」, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北) F-2分冊, 2009年7月, pp. 111-112
○6	奥田耕一郎「全国余暇事業団に関連する建築・家具・室内装飾に関する考察」, 日本建築学会大会学術講演梗概集(中国) F-2分冊, 2008年9月, pp. 615-616
③ その他 (論文)	
1	奥田耕一郎「未来派の建築ヴィジョン: 建築とドローイングの関係に対する一考察」, 私家版, 早稲田大学大学院理工学研究科修士論文, 2001年3月
2	奥田耕一郎, 寺岡拓, 大塚将之, 森田淳平「ピーター・コリンズ著『近代建築における理想の変化 1750-1950』序文試訳」, ODA事務局編「史標」第38号, 1999年12月, pp. 23-28

## 早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
③その他 （講演）	<p>3 青木孝義，迫田丈志，高橋典之，松井智哉，岸本一蔵，濱崎仁，湯浅昇，丸山一平，奥田耕一郎，谷川恭雄，中埜良昭「イタリア・ラクイラ地震により被災した文化遺産建築その1 調査概要とモニタリングシステム」，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）B-1 分冊（構造 IV），2011 年 8 月， pp. 25-26</p> <p>4 奥田耕一郎，青木孝義，迫田丈志，高橋典之，松井智哉，岸本一蔵，濱崎仁，湯浅昇，丸山一平，谷川恭雄，中埜良昭「イタリア・ラクイラ地震により被災した文化遺産建築その2 調査対象文化遺産建築の概要」，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）B-1 分冊（構造 IV），2011 年 8 月， pp. 27-28</p> <p>5 岸本一蔵，濱崎仁，迫田丈志，高橋典之，松井智哉，湯浅昇，青木孝義，丸山一平，奥田耕一郎，谷川恭雄，中埜良昭「イタリア・ラクイラ地震により被災した文化遺産建築その3 静的モニタリングの概要と結果」，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）B-1 分冊（構造 IV），2011 年 8 月， pp. 29-30</p> <p>6 奥田耕一郎「未来派建築の変容 第一次大戦後のアントニオ・サンテリア」，早稲田大学イタリア研究所・地中海研究所共催シンポジウム【両大戦間のイタリア－文化と社会】，早稲田大学，2007 年 3 月， pp. 10-13， パネリスト：小林勝，戸田三三冬，中村克己，藤岡寛己，奥田耕一郎（発表・報告書掲載順 5 番），堤康德，西村安弘，山田高誌</p> <p>7 奥田耕一郎「Italia, non' è sempre più lontano」，文化女子大学造形学部住環境学科，2006 年 7 月</p> <p>8 奥田耕一郎「Trasparenza visibile e invisibile」，ミラノ工科大学建築社会学部，2005 年 2 月</p> <p>9 奥田耕一郎「アントニオ・サンテリア（Antonio Sant' Elia, 1888-1916）の建築ドローイングについて」，早稲田大学地中海研究所 イタリア言語・文化研究会，早稲田大学，2004 年 5 月</p> <p>10 奥田耕一郎「イタリア未来派の建築について」，多摩美術大学環境デザイン学科，2003 年 6 月</p> <p>11 奥田耕一郎「アントニオ・サンテリアのドローイングに見られる「未来」観について その2 -「階段状アパートメント」について-」，日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）F-2 分冊，2002 年 8 月， pp. 67-68</p> <p>12 奥田耕一郎「アントニオ・サンテリアのドローイングに見られる「未来」観について-建築ドローイングの一解釈として-」，日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）F-2 分冊，2001 年 9 月， pp. 87-88</p>
（記事）	<p>13 奥田耕一郎「文献紹介 北川佳子『イタリア合理主義 ファシズム／アンチファシズムの思想・人・運動』」，建築史学会編「建築史学」第 55 号，2010 年 3 月， pp. 178-180</p>

## 早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
（記事）	14 奥田耕一郎「日本国政府アンコール遺跡救済チーム報告 35」，公益財団法人文化財保存・研究助成財団広報誌「絲綢之道（シルクロード）」，2007-夏号，No.54，2007 年 6 月，p.9
	15 奥田耕一郎「文献紹介 五十殿利治『日本のアヴァンギャルド芸術<マヴォ>とその時代』」，建築史学会編「建築史学」第 38 号，2002 年 3 月，pp.148-150
（著書）	16 日本建築学会編『建築設計資料集成 [集会・市民サービス]』，丸善株式会社 2002 年 9 月，pp.86-95，p.122，p.144，p.149，p.158，p.162（共著者：執筆者代表渡邊昭彦，八木澤壮一，平倉章二のほか計 21 名，編集担当委員及び著者として掲載順 1 番）
（報告書）	17 <u>奥田耕一郎</u> ，山岸吉宏「事業の概要と体制」，日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）・中川武編『アンコール遺跡調査報告書』，2009 年度版，2009 年 11 月，pp.9-15
	18 <u>奥田耕一郎</u> ，千葉麻由子，同上，2008 年度版，2008 年 11 月，pp.7-14
	19 <u>奥田耕一郎</u> ，同上，2007 年度版，2007 年 11 月，pp.7-14
	20 <u>奥田耕一郎</u> ，下田一太，嶋田はるな，同上，2005-2006 年度版，2006 年 9 月，pp.9-15
	21 早稲田大学建築史研究室編『目黒区近代建築物個別調査報告書』，目黒区教育委員会，2004 年 3 月，分担執筆
	22 早稲田大学建築史研究室編『目黒区の近代建造物悉皆調査報告書』，目黒区教育委員会，2002 年 3 月，分担執筆